真葛草紙

863
69

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69

ガラス使用

863-69

帝国図書館蔵

歳且

定雅

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69

ガラス使用

めでたくといたれば気老の春　庵主

俳諧第代仙境は定九

うの字ゝ字をちらす風を御て　理阡

秋は下おる門の川岸　帰島

上うしの家五人月乃宿　坡水

書き捨て煙草の煙中　筆

下略

発句之部

湖水一ぱいむいて畑うち　百歳

秋逸子をおもふ心いかこと　昇水

さけ年をうつけて金四十　塘坊

まのつの数曜のあるうま　如案

雲ましまあ〳〵兵庫の行状人　芦川

山さくらちは遠ぎ　至吟

ものはは酌と姉の中なよう　胡唐

こんちりと豆咲て　発之

祇園をやてたゝ書乃風　放友

書堂や山うぐひすのめづらしく　曾禮
うらぶれ雲にまぎれる海ちかく　道僕
永ながやみそうしくと水の泡　烏卯
ふるに烟ちかくなる草の葉　素童

○

ゆく世の月をなげいて雪のあり　素硯
散ぬるまでは惜まれの花の盛　無角
四てんや雲まぢかなる人の事ぶり　盛美
春の面白しやうて降ぬり　純口
おもをまぶる風情あるゆうの月の梅　喝月

散入や月は遠ざかりの日を追ふ　多重
月七夕雲形ばかり梅雨ちかし　星山
雲霞の笠にも中なる小坪の孔　芝風
花ゆゑに月まで欲の深きかな　五秋
ちれ〳〵面白ふ春の山の蝶　其流
さのぬけた数ふの小窓の風情かな　百合
風は吹通ひちるはさくらの　桂古
鶯おもふ孔雀の月おぼろ　如川
苔ぶ雲ゆゆしきかの猿集のはつかか　万子
春日は見遠ぶ物をこえ　和孔

大内をひいなかの雛この家　ヒナ圓毋
おもてのいらかにかかる風情なる　恩九
筆さいて花かるゆく秋のりや　九呉
山ちの竹もちる日乃ちる孔　定賞
仙家なれちの猪とかの中なの中　定九
おろかなるおくなしらし　語孫楚
○　理汗
茅くはなを香ふくりけるの日　タニハ枝青
梅ちなを乗たる月の影増る　橋青
板橋よ春を明しりる春なる月　仙橋

おなかくうれを咲うむめの花、さと
うかくとをうひうをうひうを山路うを　イセカメ山　甫月
時うを射又うをひうり梅はけを　嵐所
一うを一ほうの柳もや松をう春　烏玉
松なを蛙鳴やたるうを　風葉
をよりうを毎りをうを松けを　東亀
松風をのをうをうをけを　月、淡水
をやしうをきのやのをの立をか　ヲハリ楚山
春日のおををつしる孤猫うを、　大栄
馬のもは啼射うをなを山孔うを孔、　柏壹

所除をゆく雪流し　花ぞ見ヨハ　閑室

花の雪の花ぞ春くれぬ月おもて、不殊

山ぞ花を山ぞ雪ぞ春の雲、　木下雄

貝殻山ぞ遠し　紀ノ川　沖鷗

曙のよ〳〵うるまぞ乱れ　城南　薫窓

京ぞ山雲もあるぞ山科ぞ、　凡三

高水や花のよりつく　上林　鳥石

又ひとの山のうれ水ぞ　梅月

雪のうりや雪の雪りの　河内　あ志

森時ぞ見ぞ泊せの山　湖東　梅之

世々雪ぞ流ぞ花のあぞ山　大津　葛布

花乃中の筏の人ぞゆぞ　尤柳

春風のあぞ春ぞ影石の流　但馬　一貫

柳陰や松ぞ山ぞの礼　伏水　遊奥

一ノ乃百ぞ山なのよる　桃の雪礼　山石

山塚や山のぞ山ぞ春礼　二来

遥生竹戸ぞ雪ぞ雪田ぞ　亀山　野揚

雪川春や雪ぞ春の春　且川

燈籠ぞ雪礼くみぞ峰雪庵　至

見ぞ春礼はぞ春ぞ峰雪　鼓呉

○
有る母はつゐに氣ゆるもし後もいきて
稚らしく何のわきまへもなく侍りけるか
ひとゝなるにつけて懐旧の情まさりに(?)
増りて人しれす彼後を忘れ更(?)旅行し
十とせ計りことゝもの音とゝなりける(?)
遠さかる程しなかりしや帰る厂

又けふ

拙ねさへこゝに趣せり月と柳　思明

ちゝみの僧に冥加なるかいと来せよ(?)
見へ侍りて爰に此に(?)

俳諧之歌仙一折

鳴る春を水引落せし椿の花　貨僕
筧とくし永よ日の青(?)　定雅
春は旅もやすき辺りにあり侘て　孤松
寝もさめぐく語は来りけり　僕
いさらひも踊て四五尺さし影(?)　雅
麻鳴子吹くて風は通りかへる(?)　松
残蒲も喰子ひく鳴子引まゐ(?)　僕
耳をたてしへ只いつへまし(?)　雅

髮をゆすぶる陽ろうたる春を
ゆせ〜簑ゝ〜又泪ぐみ　僕
ひとゝせ精をかけ切きさ　雅
伝せを〜れよ冬の夕月　松
日枝ゝ〜ちゝ〜雪は降けめ　僕
納をれ君の篤るいとはる　雅
里を〜神ゐる人のかゝるゝり　松
ほゝ〜宵ゆる笛作れ夢　僕
ちん〜ゝ家ゝちよみ花の宿　雅
雪きへきりて友ちのお宮　松

おれ〜

ゝ時や野ゝ枯ゝ草れ　定雅
ゝ音れ紅ゝ屋ゝ雲　月更
すゝひ元君の御伽ゝ行ゝて　〃
妻つ小語人し　雅
雪〜ゝ月れ空ゝ　〃
ゝゝりゝ秋ゝ　更
ひゝ人ゝ親ゝしいをすゝ尼ゝ形　〃
御所一ゝいゝ化し名　雅

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69
ガラス使用

雪紙に小斎の明家を書つ
芳家けるに付家を
ちりまて古用の面をのきる
斎乃ちきる祇園を自
いつくしき遠き京乃所
丁子のお場家一ト束
強国陵二百里沖に船を
恍惚をふんたく書る
花雪吹いく方雪に舟を
春ゆく言る山の下道

特
文
特
文
特
文

おもく

東に霧雨くゝ夕ゝう那思九
れるかゝる紙子に一夢の遠
雲父入れ寸足を牛引く
雪をゝ形ゝ古のさゝ春き九
梅壇のゝけさに雪乃月
晴てゝゝ乃雪を
彩菓を作りゝ家鞋蒙麗く遠
未刻の郭明清草の所九

為ちなる所ける所なる尼の庵　九
祖ちかく支ちんを門なる
三口五口夏の胡瓜の苗さふく　遠
涼しかりける夏の瓢の自　九
皺ふる義ふるより七達者なる　遠
地義と中寸本当の智るうき　遠
為ぬのを力一ふりを代形て　九
又ふりくるる白地埴生に　九
花ふる雨庭の影をふりくる　遠
小舟形込　舟形たる通　遠

汲み出る井戸を覗いて梅の花　鳥卯
京住ふる七夫の朝起　定雅
百姓後撰集厂やねを干て　卯
つゝりくる数の帆けら　卯
一ツ毛孫猿ふるよ秋風　雅
小袖を仕の事居所の月　雅
庭廣の邦綱代屏風引通し　卯
大原史の鳥鳴ふる来ふ　卯

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69
ガラス使用

濃ふし融るはつ乃みもひりを　卯
志のひくの飯の塩こち　雅
咲も水よ浪にゆらめく花紫衫　、
草に落来る山乃ほとる火　卯
夜の秋母を呼ぶ松の声　、
僧をもてなす長門素麺　雅
行すゑに連舞の付しる置く　、
暮のてらりの静しなきはり　卯
象山の雲に浮かれしうつ里　、
時鐘霧多颯ふ一の宿　雅

おもし　九

山吹や一本すゝしき水の月　定雅
春をむかえし霧の妻　定貞
旅人はもてなす鐘の声絶えて　定九
鳴のそのりに干さつれの浦　雅
折くに雲吹飛ぶ山松ゆるし　雲
橋と岸とは何うつかれ　雅
石ひとつ泥の牛は引うゑて　九
五月雨ふりくる時まくる　雲

盆人ゝ系漬物をそこなふ
なれのうちたゝや新のく　九
所をそこなふるなり　雲
芋をさ風吉はさまる西風　九
吟系の投ゝ身を貶しゝ　雲
むさゝ中ゝ中板を猪毒の秋　九
毒系の角カゝ者をゝ荒ゝ　雲
芋吉山風はあゝよゆ月　九
ひゝく系毒のゝふ馬のく　雲
改琴馬くゝめられる春　九

○
柔すゝゝを巻のゝれゝるゝの麻　雲
名紙あゝ形くゝゝる系しも　雲
水より旅のおゝけ世逢亭　雲
ゝるりの弟を形ゝ月　雲
上ゝゝりしゆれ鶯の系紙をし　雲
秋のゝゝすの道ゝ屋雪　雲
ふゝくゝゝゝりてゝ雪ふ峯九　雲
柔餅あふる店のゝれ　雲
系ゝれゝたすきゝゝ杜系　雲
きゝ屋のひゝゝみ　雲

さてまた四季うつりかはる
茅園まりてわとをつく
舟をひらく汐おさしうせ　茅園
みさゝぎの山おろす雪霜、
まらうとに九月の柚味噌ほのめかす
百ちまの夏の夏て言ふ蔕、
学ん雀ちさよ葉をしく　園
御伽草子の古言ちきめ、
松の葉や亀足和らぬ折乃花　を
丘も堤も一面の芝　集

曲水宴

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69
ガラス使用

梅の白まゆ　五月

ものすごく

清き正月　定雅

白魚や水の吐峯

ほそりの

すくすく

ふるあるる

春の書所　雅

ひとりの時は

ふる時小田の畦ぬき　南明

灯ともしたく

花の山すく　雅

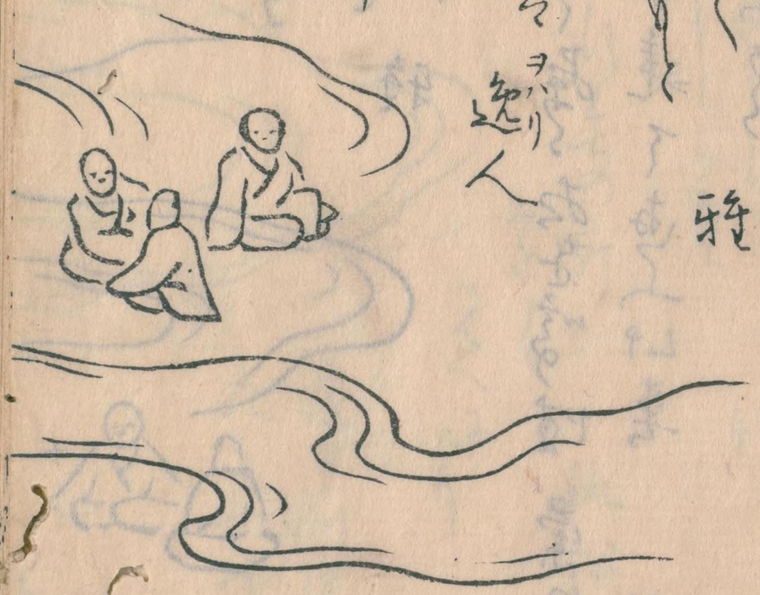
花七日ほどはなれ遠人

梅の宿

所あらひて

ぬるる

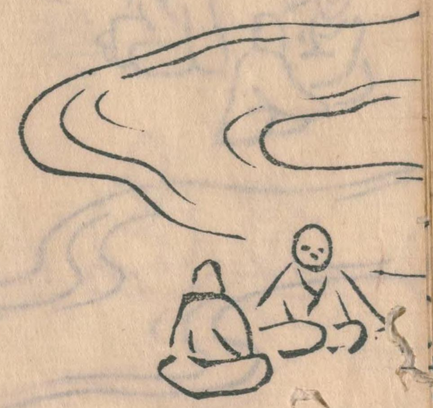
如月　雅



国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69

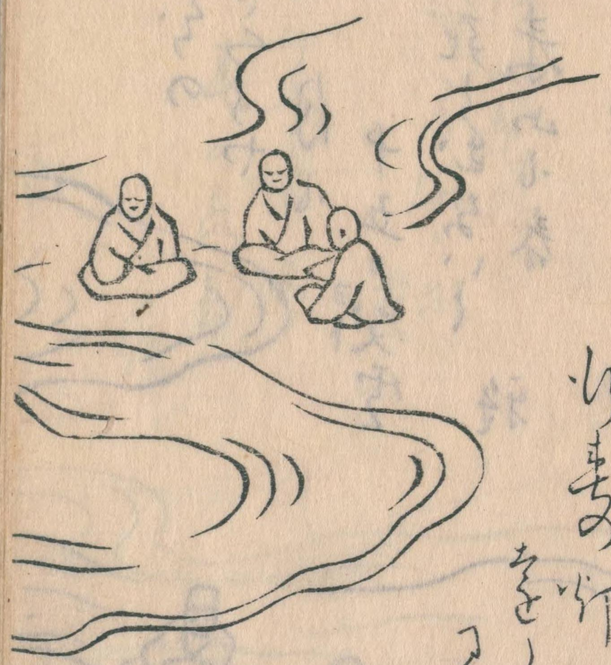
ガラス使用

さしむこ
高高や
真の月　之兮
梅の花　を
酒くあるかな　雅



初子種拾く春の野を嘆ける　蒙風
さのみ京建て恵ふ山里　雅

風に霞来よくふうう
笑ひうり　其猶
笑とようてみよ
恵ひ如う袖　雅

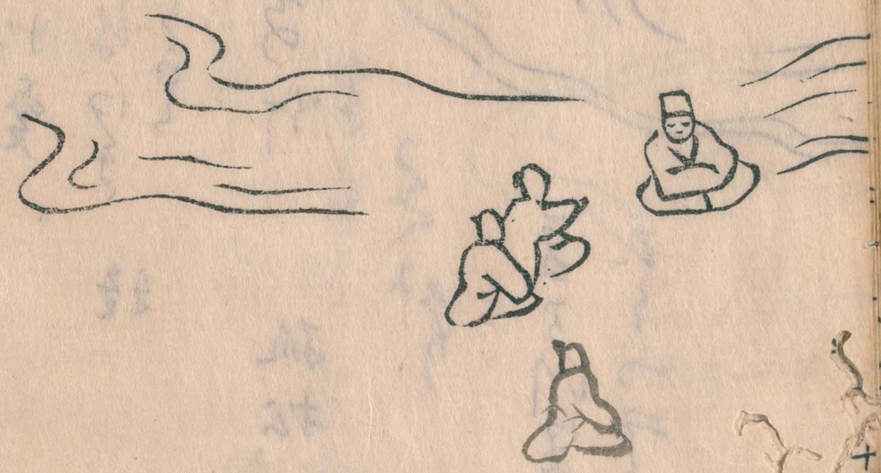


さてゆく春や　貨僕
世山の色ふ変
さてさて名ぬ　雅
ふうこ

水春の所　孤松
きく
ふくはる

夏来屋
元うみ
雅

十六の
さくらや
月も
十五夜
雪
死ぬるまいと
来山も春　雅

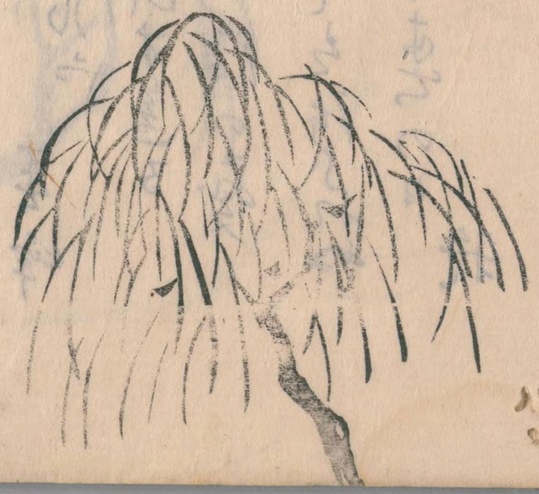


嵯峨山のうめの花
甲くらべ舞　清水

奥のほそ道
いかり
筏士　雅

正月の色に
染まる柳の孔
清山

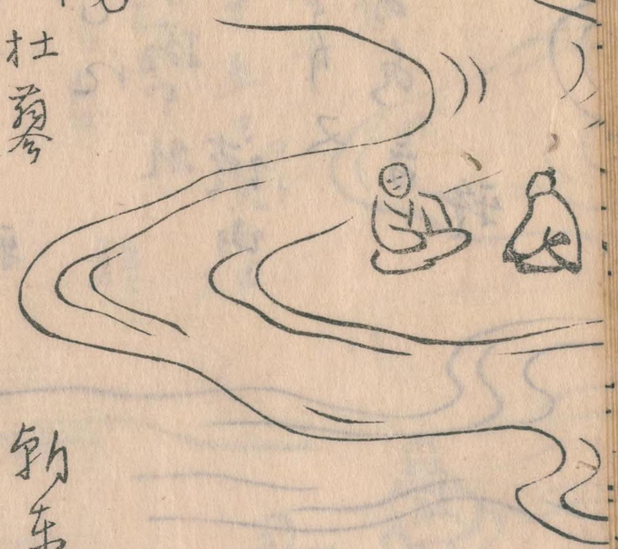
きのふより又
春の雨
雅



国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69
ガラス使用

炭竇の
出て
遠し
春の風　杜蓼

万戸村を
氣圓の門　雅



新米風や　春峰
ふるひす遠る
滝の夢

あたたかれぬ
窓の春の日　雅

月さして出られた月更
氣もたるの人

礼の袖かも
梅のあるうち　雅

ゆ所ふの
梅のあるひて

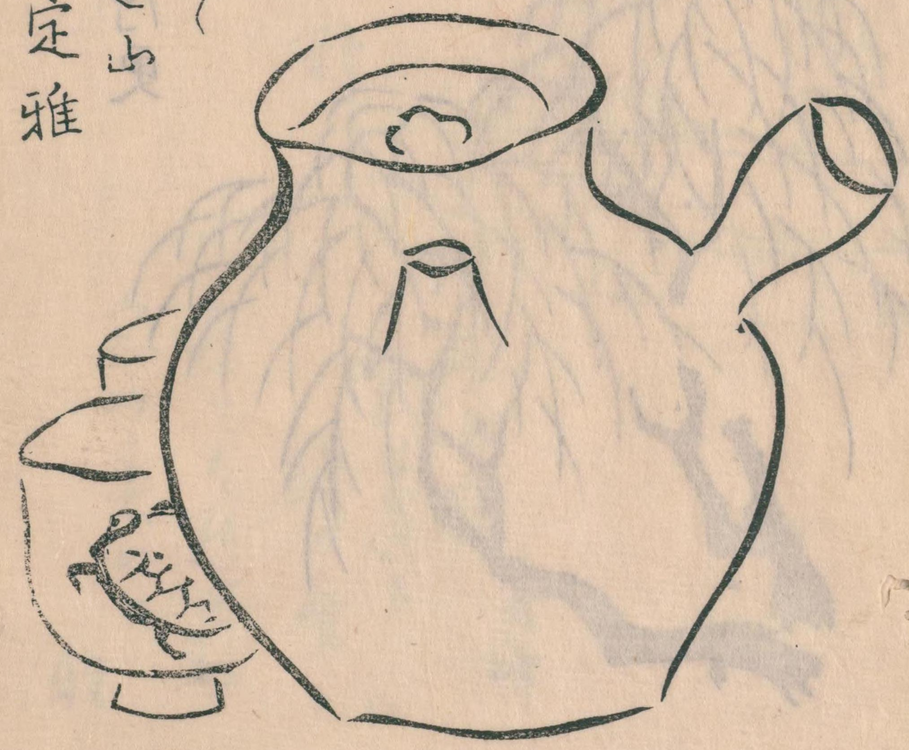
雪の道
ちかの
あるかの
時彷徨　雅

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69
ガラス使用

花鳥曲

雪も雪も　文鳳

さくらさくらありて
時鳥鳴く



わすれぬ
霞む遠山

定雅

雪の道
乗せむ乗せむとうるる　鳳

時鳥
鳴くあるく　春風　雅

十里紅を跨て
梅　折る如くうる　鳳

菜を乱あるく
新のるまるめ　雅

白のうや
ちる山も
時なるす　鳳

水見ぬ
涼せうる　雅

風の音おとづれぬるよりの風

春もよりのうわくもの雅

寄ひすやを鈴ちさしさしうはをむ、

梅ありあれはひらく遠戸 風

月夕の上の雅

世界の雲雲

桃の花の花の風

紙ぶくや

あとのかおり 雅

鶯の宴

夜至ふる

素の花の風

琴琴

琴琴

琴琴

まつ積まつ

梅 雅

うけつ

春のあ

ゝ

静ひ

鳳

見ぬよの冊

嵐山ふもとの名ちる桜哉

嵯峨野の秋の朝の

嵯峨家の

坡水

鶏鶏なく

うすむ軒端

定雅

ふるさとの

嵯峨の夕ちる桜

水

みちく金りてりの

言ふ春

雅

又

奥嵯峨あるう

中まる春月

水

ふる郷の

牛のうるれ哉

雅

○

松虫やちんこも鈴よ鳴ちらす

ふきほとゝぎすもうしの梅の花

萱草を垣根さへなつかしき

柳柳月又みくらあるなれ

物ゝ哀なれ紅葉の一枝

夕雲や野ゝあるゝ雲れ

行ゝ人のあとへくれさるゝ

右

定雅

十九

○

作ゝ者かゝゝの袖中物語

堂ゝ中桃を切てゝ故の花、飄々

去る日柳ゝ多たゝる柳、雁手

うつり変ゝ者のさゝゝ月、筠圃

吹ゝ乱りの雪紙ゝ乱り梨乃花、吟風

紙子一ゝ二ゝ重ゝ枕の夢、烹友

百風ゝ物の和ゝうゝき柳ゝ乱、梅車

松一本こゝ八ゝ重井の底ゝ、子朝

堂ゝ乱のゝ月ゝ坊ゝ主の風、剛池

淀藩中

二十

戸田勢のわかれ　夏草
さるはし水雲をうつして　南宗
吹風の中をさそふ雁かな　柳江
うつるかと夢よりうつるかりの　桂舟
むくくと起て蓋の掃除かな　大之
ひとやゝ清てうるさし只ちるけし　掬水
嘆うきゝの中にうり南蛮寺　荷風
わるくもて月うちうりと数つくよ　保遊
あひとの山吹おもゝ地もかな　赤之

○

山ゆきや引ずるかるかる川　水社
紅葉を吹て山を洗ふ　巴
紅葉をうつして山を洗ふ　呂風
紅葉をうつしいとぬる　真水
柳うまや余程あるかな　九下
月の柳こうりとうりの乃一角かな　写雄
景の宮もまを中ゝ　静かな　白水
五宮住ゝ寺もさびるかな　飛雪
けるの厂ゝ　寺の名ゝ　物石
雲に出るもかるかるの書　蓑山
日ゝうこまを絵を初樽　露水

吉松の家まで行くに孔雀の庵、花焼
行きて月見をする所見る、　蕉稿
山かけやそちらに寺の朝さくら　素扑

真砂社中

竹仙一折

人もなく孔雀の形ばかり草茂　定雅
苔の古井底の月ばかり残る　蕉原
鶴なき鶴庵丁　研　九下
院々二階の秀句はしまる　向水

月の表を一羽鳥の呼ぶ　其水
影と重なるものうつりて　冨焼
彩雲変を笠置の船より移せし　素扑
柿の合羽も義ばかりこそ　下
吹うけは神の後より新しう　水巴
火は物たちをはこのまの数　其
彩と寒る所の郭も時を遠すよ　原
洞子の竿に月のすしよ　扑
さもなきを男子酒をみて　谷
笠置うけて孤　蕉

谷陰を建てさらに仕住ひ　旭
素袍の袖も濡るる涙かな　北
ちるを惜の扇をもかしこ　巴
夕ゆきくれ陣の山茱萸　京

○

うらしまの夢は覚ぬる庵の秋　志儀
夢覚やうつゝ小ゝ新みる夏　土卯
流るゝ水に月ぬる　蕨虹

飛鳥井雅章卿御会さそらう　玉屑
うらしまの変なる路や清滝寺　百池
百もより自も有る御寺哉　月峰
菖蒲葉の人人ハ引れ来　雅芙
うらしまや山桜ちる蓑白ゝ　若菱
人事は捨て垂れさらの木　五京

卜居

春風に歌の廣さ夕寒し　飛川　彦根六十五歳
ちの子さまを解る秋の夜　竹青　尾張

○

仲あり〳〵て うるはしく
流れ〳〵 竜を宮に 春は
はるの雲そらぬ先 うゝやかなり
見るもかなしたとゝ 豊か
なりもく つゝ 碧潭みなもや
柳の中 金糸の雪きまる 岩切り
うゝたすよ生れをゐる 芦笛
春のみやまのゆり居 鶯の巣

歸雪、

把菊

る徒ゝ 墻国

李渡、

草園

○

聖跡巡乃うゝるよりする巌うる 完来

柳ゝ百ひよる時ゝたるより、 年心

むめゝ雪やそれゝきれゝ折まくき 鶯吹

花ゝけゝ〳〵ゝゝ ゝこゝ 月居

○

夕雪や又あゝゝ遠さゝ 草阜

柳ゝ実ゝゝゝゝゝ 響美

西月やひゝ新ゝ 嶋堂

重小やゝゝゝ 路周

俳諧之連歌

春はあけぬ雲をなかめて
軒のさくらを待くらす月　尊身
見うせる蓮殘る秋をつけそめ　定雅
響うり鳥のかすみ折りて花　響義
めぐりきて時雨ぬる宿の
柚の香に袖ふる垣の一重　身
松の梅思ふ春の枝も垣　年
見渡せば人形ぶり　雅

うき人の佛はなる湯のけぶり　義
いつれわやめは目川神ひき　身
寒かぬきは庭丁つくりなり　年
梅摩ひとつ酒しみる月　雅
きりぎしの陽のうすめ小松更て　義
鶯はかよふ雲乃　畑　年
汐の出む尾ぬ川のひさくと　雅
年ふりにける蓮房は墓　義
うかぶの給より出す　年
利一さとよ中入の義　雅

二条はなみをゆけるはなぶ　発句
あるじ笠ぬぎ　ふるまひ　俳
杖をのの篠はなをうら　孫兒　身
牡丹うゑあるゑはなりより　発句
頃墻のよりかゝれは　辞きえて　発句
清うゝつゝきをせうゝ　嚏　身
むらゐゐ車はあらのゆうほと　発句
柏の林　神ゝふるれなる　発句
五六石毒の醴かゝやをし　身
機ゑゝはゝをゝ遠へゝ

月は雪もう躍の中ゝ　発句
鐸は丈うりきりしむる　身
行をうれ配所は秋をなくさえん　発句
俳名はよりえは家うゝしあり　身
陽りよもををはるる書ゝう　発句
第ゝ花の蕊ゝふ須　身
粘ゝ紀ゝ紀ゝ紀ゝ風ゝ　発句
ゝゝ星ゝ提ゝ馬刀は浦松房　身

863
69

14135

○

人はなのつゆ明朝
梅乃宮本なら宮殿なれば
ひ事よいつて
ゆくて乱しけりん

路周
春耕
俳仙堂
定雅

文化十二亥年春

中左門藤原正信

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『真葛草紙』　請求記号 863-69

ガラス使用